

金剛萱遺跡の旧石器・縄文文化

Palaeolithic and Jomon Culture of the Kongokaya Site

金剛萱遺跡研究会*

Kongokaya Site Research Group

例言

- 1 本書は、金剛萱遺跡における旧石器・縄文時代の遺跡調査に関わる報告書であり、遺跡発見の2007年から2014年分までをまとめたものである。
- 2 調査は、金剛萱遺跡研究会が下仁田町教育委員会の指導・協力を受けて、実施した。
- 3 本書は、調査によって確認された遺物とその出土状況を中心に、基礎資料を提示することに重点をおいた。
- 4 本稿の執筆は、中村由克、麻生敏隆、斉藤尚人、須藤隆司、軽部達也、小林忠夫が執筆・作製した記載等をもとに、中村が全体をまとめて編集した。
- 5 調査によって出土した諸資料は、下仁田町自然史館で保管している。

I 調査の経過

下仁田町金剛萱の第四紀の火山灰層の露頭の存在に最初に気づいたのは、長年、この地域の基盤地質の調査研究をしている関東山地研究グループであった。下仁田自然学校を拠点に、関東・中部地方の火山灰層を研究している関東火山灰グループがこの情報を得て、火山灰層の地質調査中、2007年8月調査で露頭の崖や下の畑地から石器が表面採集された。2008年8月には、考古学メンバーも参加して表面採

集調査をおこない、佐久市八風山Ⅱ遺跡出土のものに類似した基部加工のナイフ形石器が発見され、この場所が遺跡である可能性が明らかになった。

2009年4月に金剛萱遺跡研究会は、表面採集を中心とする現地調査をおこなった。表面採集では、畑中央よりやや北側に黒土が残っている場所が一部みられ、その周辺に石斧や剥片が集中して採集されたことから、遺物包含層が一部残存する可能性が判明した。露頭の断面採集調査からは、明確な人為を示す石器は発見できなかった。西側の畑地の表採では、縄文時代前期前半の繊維土器1点が採集された。さらにコンニャク畑地点の測量を実施した。この結果、金剛萱遺跡の時代は、ナイフ形石器が示す後期旧石器時代のはじめごろ(38-29Ka)と縄文時代前期前半(7-6Ka)の2時期が特定されることになった。

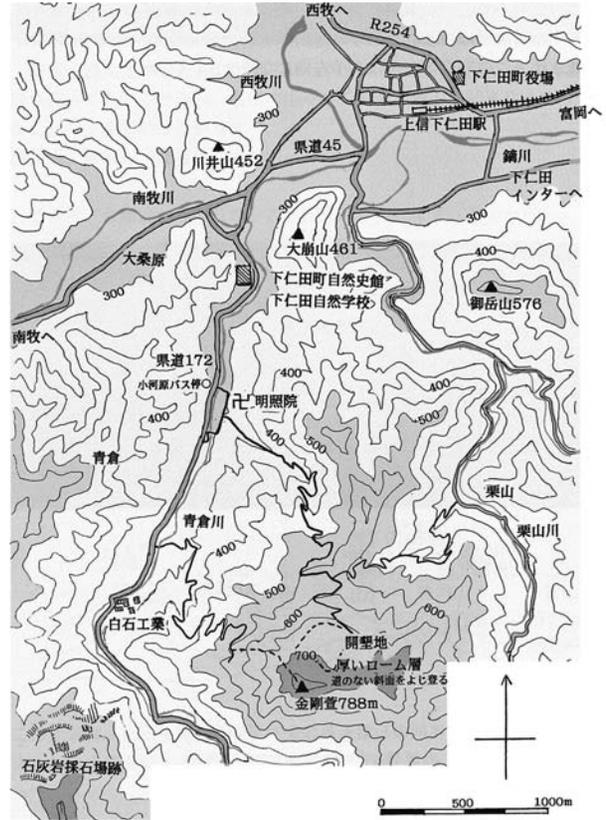
2009年11月28日から29日には、下仁田町教育委員会と協議して、遺跡であるかどうか、そして造成後も遺物包含層が残存しているかどうか、を確認するために大露頭下の畑地(コンニャク畑地点)の中に4か所の試掘調査を実施した。この結果、この畑地部分ではすでに遺物包含層のほぼ全体が削平され保存されていないが、隣接地にはまだ包含層が連続し、旧石器時代から縄文時代の遺物散布地が広がっていることが推測された。この結果を受けて、金剛萱遺跡研究会と下仁田町教育委員会が協議し、金剛萱山頂部に予測される中・近世の遺跡の可能性を含

* 執筆責任者：中村由克、連絡先：〒389-1313 長野県上水内郡信濃町古間987-1 (naka-m@opal.plala.or.jp)
Yoshikatsu Nakamura, 987-1, Huruma, Shinano-machi, Kamiminouchi-gun, Nagano, 389-1313 Japan

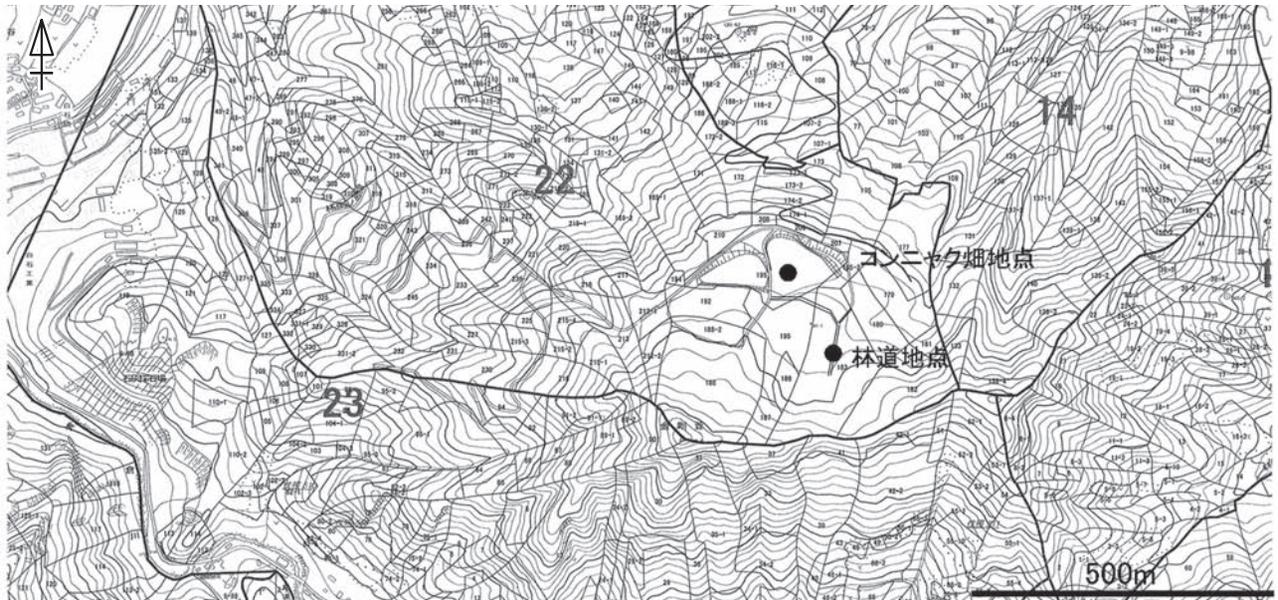
めて、金剛萱の北麓の平坦な緩傾斜地から山頂まで含めたエリアを金剛萱遺跡とすることにし、下仁田町教育委員会が群馬県教育委員会に遺物の発見届を提出し、埋蔵文化財包蔵地に登録した。

その後、2011年5月に、大露頭より一段高い緩傾斜地の中で下仁田ローム層上部層まで削られた切り通しの作業道表面を調査して、始良 Tn 火山灰 (AT) 層前後と思われる地層の表面から小剥片1点が発見された (林道地点)。これを受けて、2011年9月23日から25日 (埋戻しを含めた調査期間は10月31日まで) に第1回発掘をおこなった。この発掘で、浅間室田 (MP) 直下より約10cmに包含されるAT層準の前後の層準より、21点の出土品があり剥片等が得られた。

さらに、2014年11月22日から11月24日 (埋戻しを含めた調査期間は10月31日まで) に第2回発掘をおこなった。



第1図 金剛萱位置図



第2図 金剛萱遺跡位置図 (●印)

II 遺跡の環境

1 地質・地理的環境

下仁田町は地質上、西南日本と東北日本の接点にあたり、ほぼ東西方向に中央構造線がとおり、その北側に複雑な地質構造の下仁田構造帯が位置する。下仁田構造帯の南縁の大北野一岩山断層より南側には、三波川結晶片岩や秩父中生層などの古期岩類がつくる山地が分布し、金剛萱の山頂から遺跡のある緩傾斜地は秩父中生層の分布域にあたる。下仁田構造帯より北側には、新生代の新第三系が広く分布する。一方、西牧川上流の物語山周辺には、新第三紀中新世後期の本宿陥没地域が分布する（「下仁田町と周辺の地質」編集委員会編 2009）。

調査地の金剛萱は鐮川支流の青倉川東にそびえる標高788mの独立峰で、山頂のすぐ北側には緩傾斜地が広がっている。この平坦地は、以前より牧場として利用されていたが、近年は広く削平され、コンニャク畑となっている（コンニャク畑地点）。林道地点は2か所の畑地よりさらに高い場所にある平坦な場所である。東西方向に延びる金剛萱の山頂部の北斜面が滑落等の原因で急斜面となっているが、その斜面直下に広がる平坦地の一角に当たる（第1図・第2図）。

コンニャク畑地点から林道地点付近の緩傾斜地には、厚い下仁田ローム層が堆積しているが、それより地下に第四紀の段丘礫層等があるかどうかは確認されておらず、直接中生界をおおって分布する。

2 歴史的環境

下仁田地域で遺跡が多く立地するのは、鐮川右岸の馬山丘陵である。下仁田ICの場所にある下鎌田遺跡から南西に長尾根遺跡、観音寺原遺跡、富士塚遺跡、米山遺跡など縄文時代と古代を中心とする遺跡がほぼ連続的に分布する。下鎌田遺跡と米山遺跡では発掘調査時に旧石器時代の遺物も少量ではあるが出土している。富岡市域にあたる鐮川左岸や丹生川流域にも縄文や平安時代の遺跡が散在する。

現在までに下仁田町では、旧石器時代の遺跡は金剛萱遺跡と下鎌田遺跡、米山遺跡の3か所が知られ

ている。縄文時代の遺跡は、上述の馬山丘陵をはじめ西牧川沿いの段丘面などに36遺跡が知られている。

下仁田地域のもう1つの特徴は、中世後半の城館が19か所あることである。杣瀬城跡、下鎌田城跡、吉崎城跡などで、甲州・信州と上州との勢力の接点として軍事上、重要な地域であったことがうかがえる。

III コンニャク畑地点の調査

1 調査地の状況と調査の概要

金剛萱遺跡コンニャク畑地点は、下仁田町大字青倉金剛萱1031番地にあり、針葉樹の植林のなかに形成された広いコンニャク畑（コンニャク畑地点）である。この場所では畑地は緩やかな傾斜の平坦地地形をかなり削って、山側では崖ができており、その土砂を谷側に移動・埋立して広大な畑地が造成されている。したがって、山側では遺物が含まれると予想される層準はすでになく、また、谷側では厚い埋め立て土のために旧地表を見ることは不可能であった。

2 コンニャク畑地点の調査経過

A 2008年までの表面採集調査

1) 調査時期

2007年8月 関東火山灰グループによる地質調査

2008年8月 関東火山灰グループによる地質調査

2) 調査体制

下仁田自然学校に所属する研究団体・関東火山灰グループの学術調査として、組織は以下のとおりである。

調査主体者 関東火山灰グループ（代表 斎藤尚人）

調査参加者 小川政之、小林忠夫、小林雅弘、駒井潔、斎藤尚人、竹本弘幸、寺尾真純、中村正芳、中村由克

3) 調査経過

2007年8月1日～8月3日

下仁田町周辺のローム層調査の一環で、金剛萱のコンニャク畑の大露頭の火山灰層の調査中に、削平された畑地一帯で石器と思われる資料を採集した。

2008年8月1日～8月3日

下仁田町周辺のローム層調査と金剛萱のコンニャク畑の削平された畑地一帯で石器を採集した。

B 2008年12月調査（分布調査）

1) 調査時期 2008年12月13日～12月14日

2) 調査体制

金剛萱遺跡の2008年12月調査は、下仁田自然学校に所属する金剛萱遺跡研究会の学術調査とし、組織は以下のとおりである。

調査主体者 金剛萱遺跡研究会（代表 中村由克）
 調査参加者 麻生敏隆、石島幸三、岩井健造、大河原順次郎、小川政之、小柳津あず未、軽部達也、小林忠夫、駒井 潔、小松 恵、佐藤博子、斉藤尚人、桜井 洌、正田浩司、杉田正男、杉本麻稀葉、須藤隆司、竹本弘幸、滝上美樹、寺尾真純、中村由克、名取和香子、野村 哲、萩原正朗、古久保斗志、堀越武男、真野勝友

3) 調査経過

下仁田町自然史館に集合し、車で金剛萱に向かう。全員で大露頭の地質を確認したあと、畑地で表面採集を行う。この日は積雪のため畑地には数cmの雪があり、表面採集は条件が悪かった。

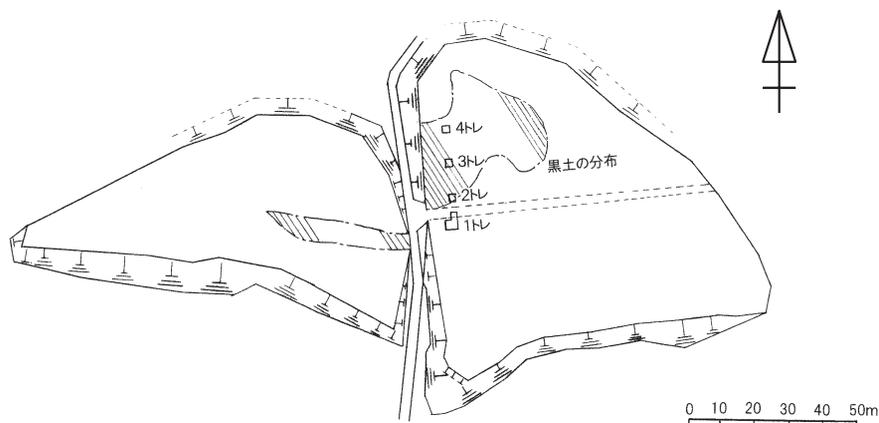
C 2009年4月調査（分布調査）

1) 調査時期 2009年4月3日～4月5日

2) 調査体制

金剛萱遺跡の2009年4月調査は、下仁田自然学校に所属する金剛萱遺跡研究会の学術調査とし、組織は以下のとおりである。

調査主体者 金剛萱遺跡研究会
 調査参加者 麻生敏隆、磯貝千恵、大河原順次郎、小川政之、軽部達也、小林忠夫、小林雅弘、駒井 潔、斉藤尚人、須藤隆司、正田浩司、関本真一、竹本弘幸、寺尾真純、中村由克、宮下 忠、吉羽興一



第3図 コンニャク畑地点位置図

3) 調査経過

2009年4月3日～4月5日

下仁田町自然史館に集合し、車で金剛萱に向かう。全員で大露頭の地質を確認、地質調査。その後、露頭において遺物包含層準と予測される上部下仁田ローム層の上半部から地表にかけての層準の地層を移植ごてや草かき鎌で削り、石器等がないかを調査した（断面採集調査）。

その後、まだ植え付けされていない畑地面の全面を対象として表面採集調査を実施。これと並行して、造成された畑地を中心に平板測量により地形図を作製した。

D 2009年11月調査（試掘調査）

1) 調査時期 2009年11月27日～11月29日

2) 調査体制

金剛萱遺跡の2009年11月調査は、下仁田自然学校に所属する金剛萱遺跡研究会の学術調査とし、組織は以下のとおりである。

調査主体者 金剛萱遺跡研究会
 調査参加者 麻生敏隆、飯島和弘、飯島富司、岩崎正春、岡田恵子、大河原順次郎、上村信之、小林忠夫、小林康夫、斉藤尚人、桜井 洌、佐藤圭司、里見哲夫、新海正博、鈴木英男、須藤隆司、滝上美樹、竹本弘幸、寺尾真純、中村由克、堀越武男、黛勝司、吉羽興一、和田晴美

3) 調査経過

11月27日夕方集合。打ち合わせ、準備。28日朝、下仁田町自然史館に集合し、車で金剛萱に向かう。全員で大露頭の地質を確認、その後、コンニャク畑の中央道路より少し東側に南北方向に4か所のトレンチを設定し、試掘調査開始。畑地表面に黒土が見られるところを中心に設定した。地表より移植ごてや草かき鎌、スコップを使って土を削り、石器等がないかを調査した（試掘調査）。

11月29日 各トレンチの地質記載、トレンチ位置の測量、平面図作成。

4) 調査方法

黒土が畑地表面に見られる場所を中心に、2m×2mのトレンチを道路沿いにほぼ南北方向に設定した。南より1, 2, 3, 4トレンチとした（第3図）。掘削はすべて手掘りで、地質の状況を確認する目的で地質調査を行った。トレンチの掘削深度は、45～225cm、平均的には20～30cmである。1トレンチは表採調査でナイフ形石器が発見された場所付近であり、上部下仁田ローム層の上部の層準が露出している場所であったので、4m×5mのL字形のトレンチにした。

5) 地質層位（上位層より記載）、調査状況

- 1トレ：20cmローム団子を含む暗黄灰色土。その下に18cmの淡黄褐色ローム層で、この最上部に始良 Tn 火山灰がレンズ状に挟在される。石片2点出土。
- 2トレ：20cm耕土、10cm攪乱層、ローム層ブロックを多く含む黒色土。40cmローム層で上部にYPをレンズ状に挟む。15cm BP.10cmローム層。20cm MP.30cmローム層で上面より10cm下にATのレンズをはさむ。石片5点出土。
- 3トレ：20cm耕土。28cm黒色土層（耕土）。45cm暗黒褐色土層で、二次的な移動を受けている。30cmローム層。12cm BP.10cmローム層。12cm + MP. 出土品なし。
- 4トレ：20cm耕土。80cm暗黒褐色土（埋め土）、ロームブロックを含む。85cm暗黒褐色土（埋め土）で、下位に行くほど黒色が強くなる。10cm YP, ローム, 15cm BP, ローム, 15cm

MP. 出土品なし。

3 コンニャク畑地点の旧石器・縄文時代の遺物

（第1表、第6図-第10図、第11図-16）

金剛萱遺跡のコンニャク畑地点の表面採集で出土した主な資料は、総数19点である。石器類18点、縄文土器1点。なお、試掘調査で地層中からは、石器・剥片類は出土しなかった。

第6図-1は良質の無斑晶質安山岩製のナイフ形石器である。平坦打面をもち、同一方向剥離の石刃を素材とする。基部両側縁と先端の片側縁にわずかな刃つぶし加工を施している。

第6図-2は頁岩製の打製石斧である。短冊形打製石斧の基部側1/2。比較的厚手で、基部の端部に礫面を残しており、主として両側から剥離製作されていて、縄文時代特有の製作技術で製作されている。

第6図-3は1/2を欠損する厚手の石核様の石器。縁辺周囲からの剥離で急角度。表面は調整加工はなく、急角度で大きく剥離される。裏面は粗雑な剥離が周縁からなされ、側縁一部に微細な段階状剥離が見られる。石斧か尖頭器の未成品と思われる。

第6図-4は両側からの剥離で全体が短冊形に整えられた局部磨製石斧。一面は平坦な剥離で、もう一面は一部に自然面を残し、断面は片側に凸のD字形に近い形態となっている。刃部は両面からの細かい剥離で調整され、一面には研磨が施されている。

第7図-5は頁岩製の厚手の石器未成品である。分厚い素材を用い、周縁からの粗い剥離で形作られ、裏面の片側縁には細かい調整剥離が加えられている。石斧か尖頭器の未成品か、搔器と思われる。

第7図-6は頁岩製の石器未成品である。一面に自然面を大きく残す大きな剥片を素材として、主に両側縁から主剥離面側に粗い剥離を施し、石斧の概形を作り出す途中の未成品と思われる。

第8図-7～第8図-11は頁岩製の削器である。第8図-7は平坦打面をもつ縦長剥片を素材とし、片側縁に不揃いな剥離で刃部が形成されている。

第8図-8は縦長の剥片を横位に側縁（上部）に急角度の調整剥離が見られ、刃部として剥片の

エッジを使用している。刃部には刃こぼれ状の微細剥離痕がみられ、使用の痕跡の可能性はある。

第8図-9は自然面を残し、弧状の端部を利用したものの。刃こぼれ状の微細な剥離痕がみられ、使用の痕跡の可能性はある。

第8図-10は円礫から剥ぎ取られた幅広剥片を素材とし、側縁に平坦な剥離で刃部が形成されている。他側縁は円礫の自然面を残す。

第8図-11は薄手で片面の一部に自然面を残し、周縁からの剥離が見られることから、石斧の未成品である可能性もある。

第9図-12～第10図-20は頁岩製の剥片である。第9図-12は厚手大形の加工痕のある剥片。円礫から大きく剥離した厚手の剥片を両側から加工されたもの。両端に礫面を残す。石斧や搔・削器の途中未成品とみられる。

第9図-13は幅広の剥片である。一面には自然面を大きく残す。第9図-14は13と同一母岩の幅広剥片である。一面に自然面を残す。表面は赤褐色で、黄褐色の斑紋が見られ、新鮮面は黒褐色である。

第9図-15は円礫の自然面を残す縦長剥片である。第9図-16は幅広の剥片である。第9図-17は円礫の自然面を残す幅広の剥片である。第10図-18は方形の幅広剥片である。打面は自然面の平坦打面である。第10図-19は薄手の幅広剥片である。平坦打面である。

第10図-20は垂円礫の礫面を大きく残す極めて厚手の剥片である。

第10図-21は縄文土器の小破片である。縄文時代前期前半期のものである。胎土には植物繊維を含む繊維土器である。表面には判然としないが縄文原体RLLの多条縄文?が施されていて、原体は粗い。この土器はコンニャク畑地点の中央道路より西側の畑地で出土したものである。金剛萱遺跡では縄文土器の出土はこの1点だけである。また、西側畑地では、これ1点以外にはあまり遺物が得られていない。

金剛萱遺跡のコンニャク畑地点の南側の上段の畑地（新発見地点）で表面採集で2点の遺物が採集された。

第10図-22は極めて厚手の頁岩製の石斧未成品で

ある。周縁からの剥離で形作られ、刃部を丁寧な調整で作り出している。上部は極めて分厚く残存していて、器体をこれ以上薄くできなく破棄されたものと思われる。

第10図-23は一面に自然面を残す無斑晶質安山岩の幅広剥片である。大きな平坦打面である。

第11図-16は、コンニャク畑地点の大露頭で表採された珪質細粒砂岩（頁岩）製の剥片である。

IV 林道地点の調査

1 調査地の状況と調査の概要

2011年発掘地（林道地点）は、下仁田町大字青倉金剛萱1031番地にあり、針葉樹の植林のなかにある。広いコンニャク畑（コンニャク畑地点）より南側にあたり、未舗装の作業道の敷地である。作業道は車1台がかろうじて通れる広さであり、平坦にはされているが、側溝とか土留めなどの構造物は一切設けられていない。この場所では作業道は原地形をかなり削って通っていて、道路面は掘削された場所で、ローム層が露出している。したがって、道路面をそれほど掘削しなくても目的とするAT層直下の暗色帯が調査できる状況となっていた。

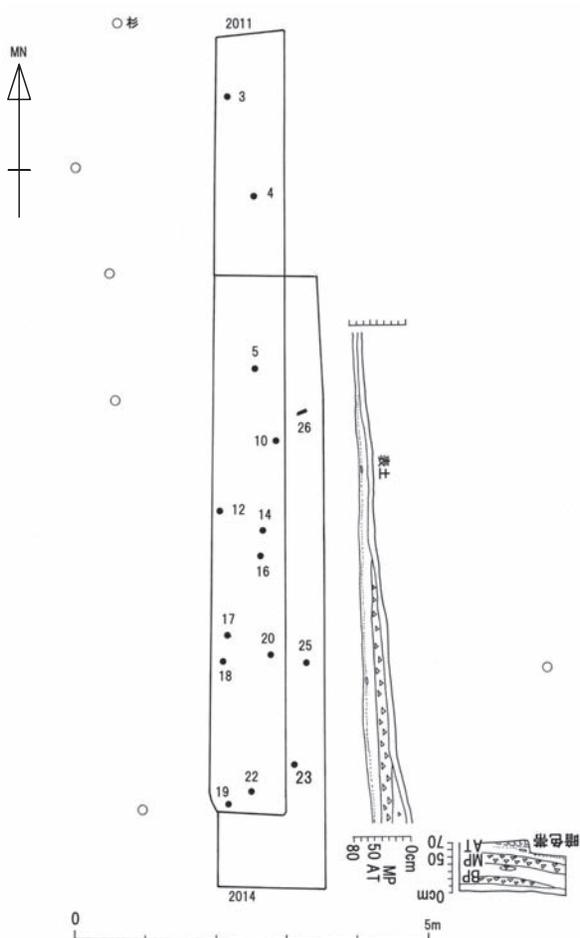
発掘地における地質層序は、地表からかなり削平されている状態で、上位より5cm黄褐色ローム層、5～14cm褐色軽石層（浅間板鼻褐色軽石：BP）、20cm黄灰色ローム層、13cm赤褐色軽石層（浅間室田軽石：MP）、15cm+黄褐色ローム層という層位である。最下位のローム層では、MP直下から10cmほどのゾーンには火山ガラスが含有され、AT層準であることがわかる（第5図）。剥片等の遺物は、このAT層準付近から出土している。遺物は、調査トレンチのほぼ全域から散在して出土し、集中箇所は確認できなかった。また、遺構は未確認である（第4図）。

2 林道地点の調査経過

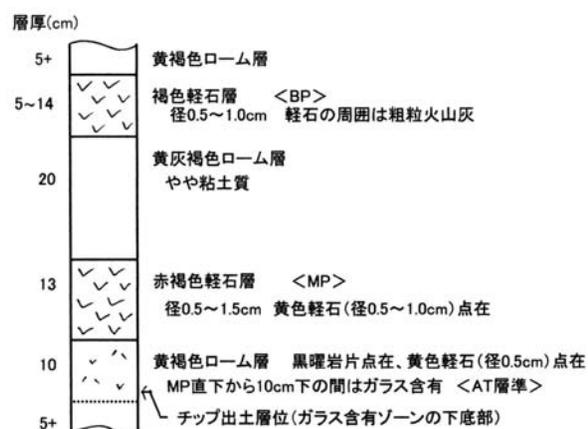
A 2011年発掘（第1回発掘）

1) 調査体制

金剛萱遺跡の2011年発掘調査は、下仁田町教育委員会の指導を受けた金剛萱遺跡研究会の学術調査とし、組織は以下のとおりである。



第4図 林道地点平面図



第5図 林道地点の地質柱状図

発掘調査

調査主体者 金剛萱遺跡研究会

調査担当者 麻生敏隆

調査参加者 会田信行, 麻生敏隆, 飯島富司, 猪野ともえ, 岩崎正春, 大河原順次郎, 北爪智啓, 久保田郁夫, 小林忠夫, 小林雅弘, 駒井 潔, 齊藤尚人, 桜井 洸, 関谷友彦, 竹村健一, 中村由克, 和田晴美

2) 調査経過

9月23日(金) 下仁田町自然史館に集合し, 調査機材一式を車に乗せ, 車で金剛萱に向かう。作業道がローム層まで削って作られている場所に, 道路部分にそってほぼ南北方向の調査区を設定。道路面には直接, 下仁田ローム層上部層が露出しているので慎重に発掘作業をおこなう。

9月24日(土) 剥片, 石片等が多く出土。

9月25日(日) 地層の掘削作業は終了し, 調査区周辺の平板測量を実施。この付近には標高の基準がなかったので, 調査グリッド北西端のA杭を基準として, +200cmにレベルを設定し発掘地及び出土品の位置を計測した。発掘地の土を元に戻し, 現場を終了する。下仁田町自然史館に戻り, 遺跡の合宿調査を解散する。

10月31日(月) 調査地の埋め戻しを最終確認し, 発掘調査の全工程を終了したことを確認する。

3) 調査方法

最初に発見された小剥片のあった場所を中心に, 1.0m×9.8mのトレンチを道路沿いにはほぼ南北方向に設定した。掘削はすべて手掘りで, 遺物包含層が予測される暗色帯を掘りきるまで行われた。トレンチの掘削深度は, 18~45cm, 平均的には20~30cmである(第4図, 第5図)。

出土した資料はすべて残して柱状に出土位置を保存し、まわりを掘削した。出土品は北のものから遺物番号をつけた。

B 2014年発掘（第2回発掘）

1) 調査体制

金剛萱遺跡の2014年発掘調査は、下仁田町教育委員会の指導を受けた金剛萱遺跡研究会の学術調査とし、組織は以下のとおりである。

発掘調査

調査主体者 金剛萱遺跡研究会

調査担当者 麻生敏隆

調査参加者 麻生敏隆、片山美雪、金井忠宏、神戸求、小林忠夫、駒井 潔、斉藤俊由紀、斉藤尚人、塩野敏昭、関めぐみ、関谷友彦、竹本弘幸、寺尾真純、寺崎紘一、中村由克、真野勝友、光井 久、宮澤結里、村田幸一、柳澤尚幸、和田晴美

2) 調査経過

11月22日(金) 下仁田町自然史館に集合し、調査機材一式を車に乗せ、車で金剛萱に向かう。作業道がローム層まで削って作られている場所に、道路部分にそってほぼ南北方向の調査区を設定。道路面には直接、下仁田ローム層上部層が露出しているので慎重に発掘作業をおこなう。下仁田町では、この期間、ネギサミットが開催されていて多忙であったが、準備等分担して進められた。

この日、22時8分に長野県北西部を震源とするマグニチュード6.7の地震が発生し、下仁田町でも揺れが感じられた。長野県で大きな被害が発生したため、急遽、一部参加者は予定を変更して被害調査に向かった。

11月23日(土) 剥片、石片などが出土、午後から遺物の出土位置などの測量開始。

11月24日(日) 地層の掘削作業は終了し、調査区周辺の平板測量を実施。この付近には標高の基準がなかったので、調査グリッド北西端のA杭を基準として、+200cmにレベルを設定し発掘地及び出土品の位置を計測した。発掘地の土を元に戻し、現場を終了する。下仁田町自然史館に戻り、遺跡の合宿調査を解散する。

11月30日(日) 調査地の埋め戻しを最終確認し、発掘調査の全工程を終了したことを確認する。

3) 調査方法

第1回発掘地を中心に、東側に0.5m幅でトレンチを道路沿いに拡張した。掘削はすべて手掘りで、遺物包含層が予測される暗色帯を掘りきるまで行われた。トレンチの掘削深度は、18~45cm、平均的には20~30cmである。

出土した資料はすべて残して柱状に出土位置を保存し、まわりを掘削した。出土品は第1回の番号の最後から引き続いて、北のものから遺物番号をつけた。

3 旧石器時代の遺物（第2表、第11図）

金剛萱遺跡林道地点の第1回発掘調査で出土した資料は、総数21点である。その出土品のうちの10点は人工的な遺物であり、2011年5月に採集した1点も含む。その他に礫9点と炭化物2点がある。

第2回発掘調査で出土した資料は、総数11点である。その出土品のうちの4点（遺物番号：22、23、25、26）は人工的な遺物である。その他に石片7点がある。以下は第1回、第2回の発掘（林道地点）で出土したすべての遺物を記載する（第11図、第2表）。

第11図-1・口絵1-1は、第2回発掘調査で出土した局部磨製石斧である。上下方向の剥離を中心に器形が整えられた石斧の側縁部の破片である。下端には表裏両面に研磨が施されており、刃部には刃こぼれが生じている。上端部には上方向からの粗い剥離痕があり、図の右端は主剥離面であり、石斧の完成後に大きく剥離されていることから、石斧の刃部再生時に大きく器形変更の必要に迫られて側縁部を上方向からの剥離で取り除いた破片であることがわかる。器体を薄くする必要があり、その調整剥離を行うための打面作出目的であった可能性がある。

また、刃部付近の稜線や側縁部の稜線は部分的に稜線磨耗が見られることから、使用時の擦れと考えられる。一方、再生時の剥離と判断した部分には、このような擦れは見られず、シャープな稜線である。石斧として最初製作された時の大きさは、刃部

の幅が6～8cm、長さが14cm以上、厚さが3.2cmの大きな石斧であったと推定される。

本資料の石材は、緑灰色の緑色岩である。土色帖によれば10Y5.5/2（オリーブ灰色）で、帯磁率 27.5×10^{-5} SIと磁性は小さく、比重3.01である。小さな円形の粒子状のものが多く含まれている。これらはガスの抜けた気泡のある火山ガラスの構造をもつハイアロクラスタイトとみられる（中村・保科 2016）ことから、三波川帯御荷鉢ユニットの中でも特別なものと思われる。

第11図-2は、結晶片岩の小さく薄い剥片で、裏面は主剥離面である。石斧の調整剥片と考えられる。第11図-3は、珪質細粒砂岩（頁岩）製のごく小さな剥片である。碎片の可能性もある。この石材は、南牧川最上流の熊倉川（象ヶ滝付近）に分布する新第三紀中新世の内山層の珪化作用を受けた部分のものである（堀越・中村 2015）。第11図-4～第11図-12は、秩父帯起源と思われる緑色岩製の剥片である。12以外は原岩が凝灰岩と思われる。これら石材は、金剛萱付近に分布する秩父累帯北帯に含まれるものと推定される。

第11図-13は、脈石英製の剥片である。第2表-14・15は、無斑晶質安山岩製の剥片である。八風山産と推定される。

図示しなかった資料は、在地の秩父累帯北帯起源と思われる緑色岩の石片である。剥離面をもつが、人為とは判断できなかったものである。

いずれも出土層序はATより下位の暗色帯中で、年代は約3.8～2.9万年前、群馬編年のI期からII期にかけての時期、武蔵野編年のX層からVI層にかけてと比定される。

V 金剛萱遺跡発掘調査の意義

1 コンニャク畑地点の時期と性格

コンニャク畑地点では多くの遺物が得られているが、地層中から出土したものはなく、すべて表面採集資料である。基部加工のナイフ形石器は後期旧石器時代前半期に特徴的な形態のものである。同様の形態のものは、長野県佐久市の八風山II遺跡に知ら

れている。第6図-4の局部磨製石斧は刃部の一部のみ研磨面が見られるものである。ナイフ形石器と同じ後期旧石器時代前半期のものか、旧石器時代末の神子柴期のものか、あるいは縄文時代のものかは今のところ未検討である。

第6図-2は縄文時代の打製石斧の破損品である。縄文時代の未成品でない石斧はこれ1点であった。3・5・6は石器の未成品であるが、縄文時代か旧石器時代のものかは不明である。11・12も同様の資料である。ほかの削器、剥片類は縄文時代の所産と思われるが、時代の判定ができる確実な手掛かりは得られていない。

コンニャク畑地点は広い面積の緩傾斜地を削平して、大量の表土を移動して畑地が造成されているために、現時点ではこの遺跡の状況は把握できない。遺物は旧石器時代から縄文時代にかけてのものであり、すべてが同一時期に属するものではないと思われるので、今後の検討が必要である。

2 林道地点：後期旧石器時代前半期の局部磨製石斧の存在

出土遺物の中で使用の痕跡を残すのは局部磨製石斧1点のみである。石斧調整剥片は石材が違うものの石斧製作に伴うものであり、遺物組成の中で石斧関連の資料が占める割合が高いことは特筆される。その他は、14点すべてが剥片である。したがって、この点数では発掘地点の性格等は推定することができない。石器や剥片が集中する遺物集中区の検出が待たれるところである。

金剛萱遺跡では、これまでのコンニャク畑地点の調査で石器類が得られているが、いずれも表面採集によるものであった。林道地点の発掘調査では、出土点数は少ないながら、AT付近の層準という地層中から発見されたものである意義は大きい。金剛萱遺跡のコンニャク畑地点で表採されたナイフ形石器は、形態からAT直下の暗色帯付近を本来の包含層とする後期旧石器時代前半期のものと推定されていたので、これと同時期のものと思われる。

局部磨製石斧が使われた時代は、後期旧石器時代前半期（約3.8～2.9万年前）で、始良Tn火山灰

(AT) より以前の時代である。旧石器時代の石斧は、群馬県内では岩宿遺跡（みどり市）、分郷八崎遺跡（渋川市）、下触牛伏遺跡（伊勢崎市）、十二社遺跡（桐生市）などをはじめとし、全国でもやや多い地域であり、県西部では甘楽町（甘楽SA）の白倉下原遺跡、天引向原遺跡や安中市の古城遺跡などで出土している。県境を越えた佐久市八風山遺跡群ではこの時期の良好な石刃石器群が出土している。金剛萱遺跡はこれらの中間を埋める位置にある点で注目される。

金剛萱の発掘をはじめから周辺遺跡の遺物を見直し作業を行っていて、その過程で、下仁田町の下鎌田遺跡（下仁田IC）で縄文時代の住居址の中から局部磨製石斧が1点出土しており、旧石器時代のものであることを再確認した（橋本（2004）が旧石器時代と指摘していた）。

縄文・弥生時代の磨製石斧は、木の伐採と加工用とされているが、旧石器時代の石斧に関しては、①木の伐採用という説と、②動物の狩りに使われたという説があり、両方に使ったとする研究もあり、決着を見ていない。旧石器時代の石斧を保有する遺跡は、通常、大規模な遺跡が多く、環状ブロック群といって、数m単位の石器集中場所（ブロック）が円形に集まる形で出土する場合もある。旧石器人の集団が多く集まった場所だと解釈されていて、このような特殊な遺跡も後期旧石器時代の前半期だけの現象である。

金剛萱遺跡は、同時期のナイフ形石器が表面採集で確認されているコンニャク畑地点と林道地点からなる。いずれの遺跡も標高680m以上の高い山の山頂近くに立地しており、このような場所に後期旧石器時代前半期の遺跡が見つかる例はあまり多くない。群馬県内で遺跡が多いのは、河川流域の少し小高い段丘面の端や山裾であり、関越自動車道や上信越自動車道などの建設時の発掘で発掘調査が多く行われた。今回は小規模な学術調査での成果であり、その点でも意義は大きい。信州に向かう山中に遺跡が立地することが、何を意味するのかは今後の課題である。

3 下仁田町での旧石器遺跡の確認

金剛萱遺跡周辺の遺跡をみると、北東方の下仁田インターの場所にある下鎌田遺跡では、1号ブロックと呼称される遺物集中区1か所が検出され、石核1点、剥片2点、礫4点の計7点が出土している。この他に、槍先形尖頭器やナイフ形石器を中心とする石器が遺跡内より出土している。槍先形尖頭器は、群馬編年のIV期のBPから浅間大窪沢第1軽石（Ok1）にかけての特徴的な主要な石器であり、武蔵野編年のV層からIV層上部までに対比される。おそらくはナイフ形石器も同様と推定される。

下鎌田遺跡と同じ馬山丘陵に位置する米山遺跡では、農道改築工事に伴う発掘調査で剥片1点、側縁加工した小形のナイフ形石器1点が出土した。群馬編年のⅢ期からIV期にかけての時期であり、層準はAT上位からBP上位、武蔵野編年のV層からIV層上位と推定される。

さらに、下鎌田遺跡では縄文時代中期の竪穴住居や土坑から出土した黒曜石製剥片を中心に、100点の試料が原産地分析された。その結果、8点の原産地は不明であるものの、残りの92点については、星ヶ塔産50点、男女倉産3点、和田峠産38点、八ヶ岳産1点との結果が得られた。この結果、縄文時代中期には、信州産黒曜石が関東地方に広く流通するが、下仁田地域が運搬路の1つであったといえるだろう。このように、下仁田地域では金剛萱遺跡でみられた後期旧石器時代前半期よりも後の時代の遺跡・遺物も知られており、考古学的には注目される。

謝辞 金剛萱遺跡の発掘調査にあたっては、下仁田町と地主の泉 英明氏に多大なご協力をいただいたことをお礼申し上げます。

文 献

- 橋本勝雄（2004）後期旧石器時代前半期の石斧に関する一考察。印旛郡市文化財センター研究紀要，3，1-27。
堀越武男・中村由克（2015）鐮川上流地域にみられる石器石材「頁岩」の産地。群馬県立自然史博物館研究報告，19，115-120。
稲田孝司・佐藤宏之編（2010）旧石器時代（上）。講座日本

の考古学1, 青木書店, 東京, 624p.
 関東火山灰グループ (2009) 群馬県甘楽郡下仁田町でみつ
 かった下仁田ローム層の砂粒組成. 群馬県立自然史博物
 館研究報告, 13, 87-93.
 小島敦子・山口逸弘・岩崎泰一・大西雅広 (2010) 米山遺
 跡, 県営農免道路整備事業馬山3期に伴う埋蔵文化財発
 掘調査報告書. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,
 120p.
 金剛萱遺跡研究会 (2009a) 金剛萱遺跡-下仁田町に発見さ
 れた旧石器. 地学団体研究会63総会講演要旨集, 72.
 金剛萱遺跡研究会 (2009b) 金剛萱遺跡. 石器文化研究,
 15, 89-90.
 金剛萱遺跡研究会 (2013) 金剛萱遺跡発掘調査報告書
 2013. くりっぺ, 72, 別刷1-6.
 金剛萱遺跡研究会「下仁田自然学校文庫8」編集委員会編

著 (2014) 金剛萱に旧石器時代をさぐる-金剛萱遺跡と
 下仁田ローム層-. 下仁田自然学校文庫8, 56p.
 小菅将夫編 (1993) 環状ブロック群-3万年前の巨大集落
 を追う-. 笠懸野岩宿文化資料館, 60p.
 小菅将夫・大工原豊・麻生敏隆 (2004) 群馬の旧石器. み
 やま文庫, 前橋, 175p.
 中村由克・保科 裕 (2016) 金剛萱遺跡の局部磨製石斧の
 石材とその意義. 下仁田町自然史館研究報告, 1, 21-24.
 「下仁田町と周辺の地質」編集委員会編 (2009) 下仁田町
 と周辺の地質. 下仁田自然学校, 122p.
 下仁田町遺跡調査会 (1997) 下鎌田遺跡, 関越自動車道
 (上越線) 地域埋蔵文化財発掘調査報告書. 下仁田町教育
 委員会, 914p.
 須藤隆司 (2006) 石槍革命・八風山遺跡群. シリーズ遺跡
 を学ぶ, 25, 新泉社, 東京, 95p.

報告書抄録

書名	金剛萱遺跡の旧石器・縄文文化	
副書名		
シリーズ名	下仁田自然史館研究報告	
シリーズ番号	第1号	
編著者名	中村由克・麻生敏隆・斉藤尚人・須藤隆司・軽部達也・小林忠夫	
編集機関	下仁田自然学校運営委員会・下仁田自然史館研究報告編集委員会	
所在地	370-2604 群馬県甘楽郡下仁田町青倉158-1 TEL 0274-70-3070	
発行年月日	2016/3/31	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こんごうかやいせき 金剛萱遺跡 こんやくほたちてん コンニャク畑地点	ぐんまけんかんらくんしもにたまち 群馬県甘楽郡下仁田町 あおくらこんごうかや 青倉金剛萱1031	10382	54	36度10分58秒	138度46分50秒	91127 ～ 91129	32㎡	学術調査
こんごうかやいせき 金剛萱遺跡 りんどうちてん 林道地点	ぐんまけんかんらくんしもにたまち 群馬県甘楽郡下仁田町 あおくらこんごうかや 青倉金剛萱1031	10382	54	36度10分53秒	138度46分50秒	110923 ～ 111031	10㎡	学術調査
こんごうかやいせき 金剛萱遺跡 りんどうちてん 林道地点	ぐんまけんかんらくんしもにたまち 群馬県甘楽郡下仁田町 あおくらこんごうかや 青倉金剛萱1031	10382	54	36度10分53秒	138度46分50秒	141122 ～ 141130	13㎡	学術発掘

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金剛萱遺跡 コンニャク畑地点	散布地	旧石器時代 縄文時代	なし	ナイフ形石器, 削器, 剥片 縄文土器片	後期旧石器時代のナイフ形石器, 縄文時代前期の打製石斧, 縄文土器が表採で採集されているが, 試掘調査では包含層がなく, 生活面が残存しないことが判明. 試掘による出土品はなく, 記載遺物はそれ以前からの採集遺物である.
金剛萱遺跡 林道地点	散布地	旧石器時代	なし	剥片	後期旧石器時代の前半期の剥片が出土.
金剛萱遺跡 林道地点	散布地	旧石器時代	なし	局部磨製石斧, 剥片	後期旧石器時代前半期の局部磨製石斧, 剥片が出土.

(注) 北緯・東経は世界測地系による。

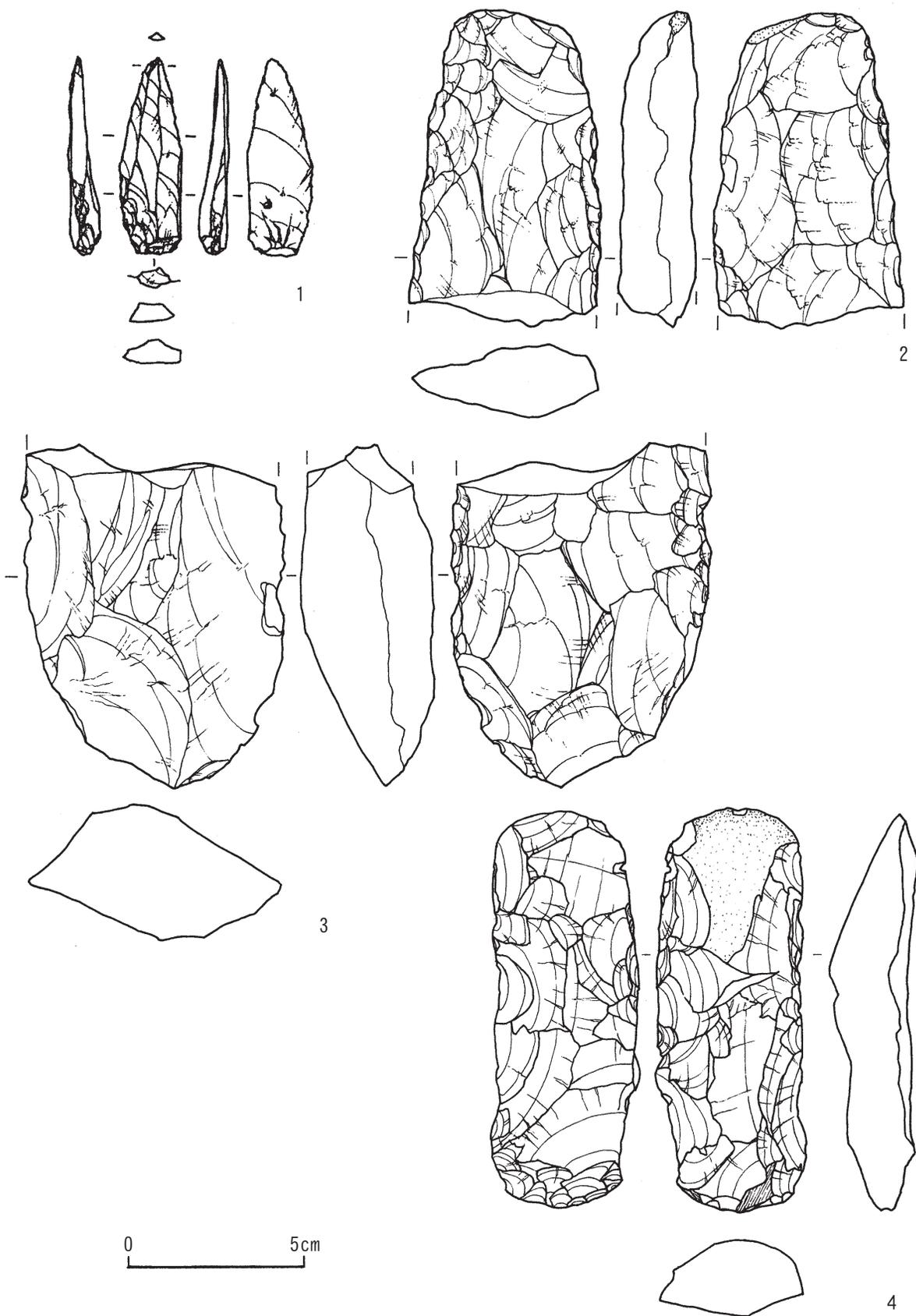
第1表 金剛萱遺跡・コンニャク畑地点採集の遺物一覧

No	番号	名称	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	80803KON	ナイフ形石器	無斑晶質安山岩	54.7	17.0	9.0	7.4	基部調整
2	0904KON-7	打製石斧	頁岩	87.5	53.8	21.2	127.4	
3	0904KON-6	石器未成品	頁岩	99.9	73.7	37.2	256.2	石斧, 尖頭器?
4	080503KON-2	局部磨製石斧	頁岩	115.5	42.4	24.5	128.7	
5	070801KON	石器未成品	頁岩	130.0	93.2	46.3	553.3	石斧, 尖頭器・搔器?
6	080503KON-1	石器未成品	頁岩	140.3	86.1	32.8	444.7	石斧, 尖頭器?
7	0904KON-25	削器	頁岩	92.6	53.7	20.6	74.1	
8	0904KON-4	削器	頁岩	32.7	56.0	9.2	17.2	
9	0904KON-11	削器	頁岩	34.8	61.8	13.9	24.8	
10	なし	削器	頁岩	106.3	61.5	28.1	141.2	
11	080503KON-3	削器	頁岩	109.5	65.4	15.0	114.1	石斧未成品?
12	0904KON-13	加工痕のある剥片	頁岩	135.5	100.0	27.3	403.0	
13	080803KON-1	剥片	頁岩	69.3	51.4	17.5	53.2	
14	0904KON-8	剥片	頁岩	39.9	43.1	10.9	13.1	
15	0904KON-5	剥片	頁岩	74.0	33.6	7.9	16.3	
16	080808KON-2	剥片	頁岩	44.6	32.4	9.8	9.8	
17	0904KON-11	剥片	頁岩	39.7	69.8	9.9	31.8	
18	0904KON-23	剥片	頁岩	37.2	43.9	11.6	14.1	
19	0904KON-1	剥片	頁岩	41.5	51.1	6.3	11.6	
20	080803KON-3	剥片	頁岩	86.6	91.7	50.2	308.4	
21	なし	縄文土器		28.4	27.0	9.9	7.9	縄文前期, 繊維土器
22	101106	石斧未成品	頁岩	99.9	79.4	52.4	342.2	コンニャク畑上段
23	101106	剥片	無斑晶質安山岩	56.4	57.0	12.3	29.0	コンニャク畑上段

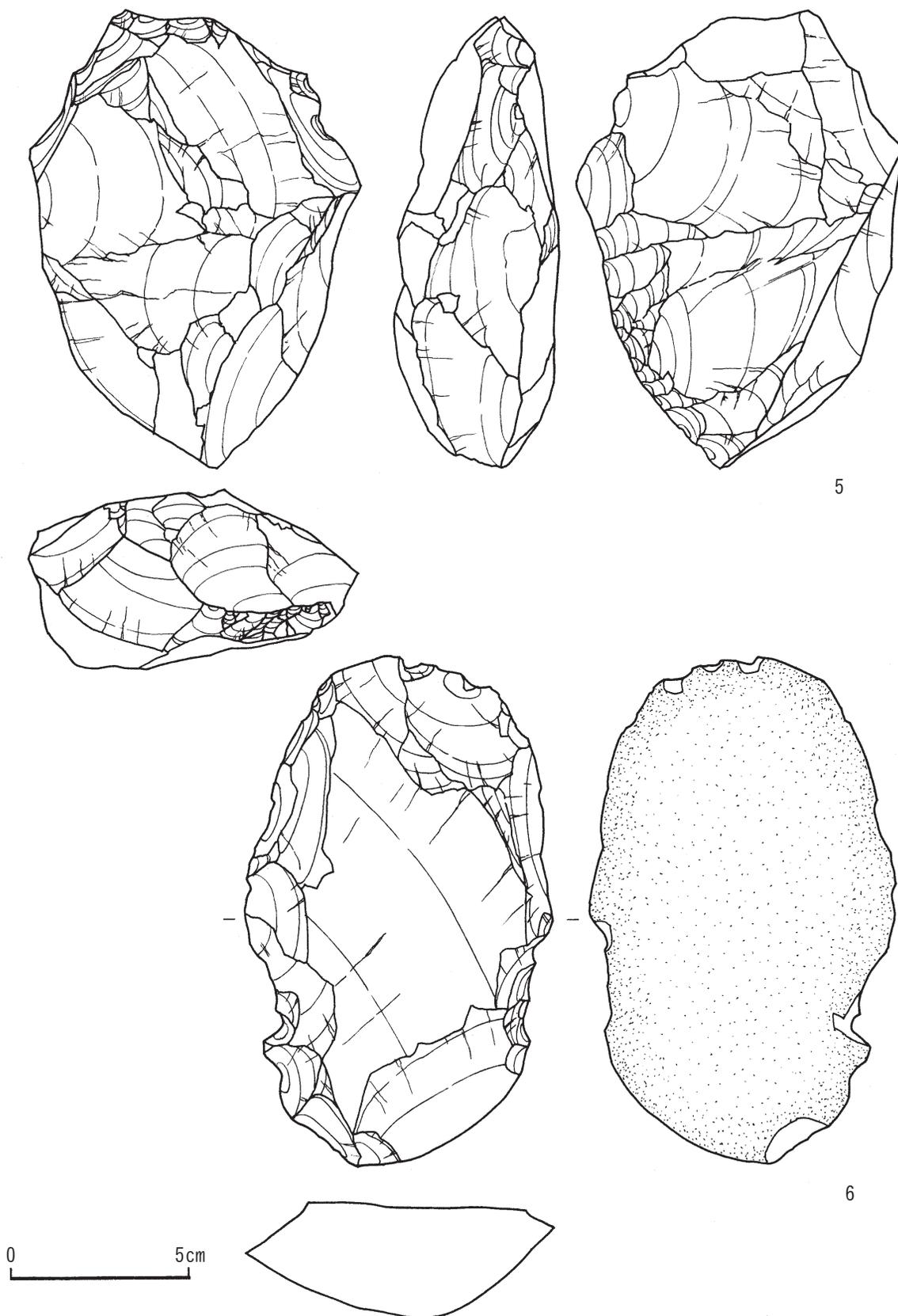
第2表 金剛萱遺跡・林道地点出土の遺物一覧 (第11図; No.16はコンニャク畑地点)

No	番号	名称	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	2014・26	局部磨製石斧 破片	緑色岩 (御荷鉢帯)	136.9	21.1	32.0	92.6	研磨痕あり, 側縁破片
2	2011・16	石斧調整剥片	結晶片岩	19.8	16.0	3.3	1.4	
3	2011・5	剥片	細粒砂岩	8.6	13.4	1.3	—	
4	2011・3	剥片	緑色岩 (秩父帯)	29.3	18.2	5.5	3.6	
5	2011・14	剥片	緑色岩 (秩父帯)	41.3	16.4	9.4	5.3	
6	2011・4	剥片	緑色岩 (秩父帯)	38.4	13.1	8.5	3.2	
7	2011・10	剥片	緑色岩 (秩父帯)	28.4	25.3	7.9	4.2	
8	2011・20	剥片	緑色岩 (秩父帯)	40.5	16.1	10.2	7.8	
9	2011・12	剥片	緑色岩 (秩父帯)	20.5	27.5	7.4	4.9	
10	2014・25	剥片	緑色岩 (秩父帯)	28.9	43.3	23.5	23.5	
11	2014・23	剥片	緑色岩 (秩父帯)	19.6	17.5	6.4	1.7	
12	2014・22	剥片	緑色岩 (秩父帯)	41.2	17.4	10.4	7.5	玄武岩起源
13	2011・17	剥片	脈石英	26.1	28.8	11.5	7.8	
14	2011・18	剥片	無斑晶質安山岩					
15	2011・19	剥片	無斑晶質安山岩					
16	2011表採	剥片	細粒砂岩	64.1	43.3	17.1	30.3	コンニャク畑地点・大露頭

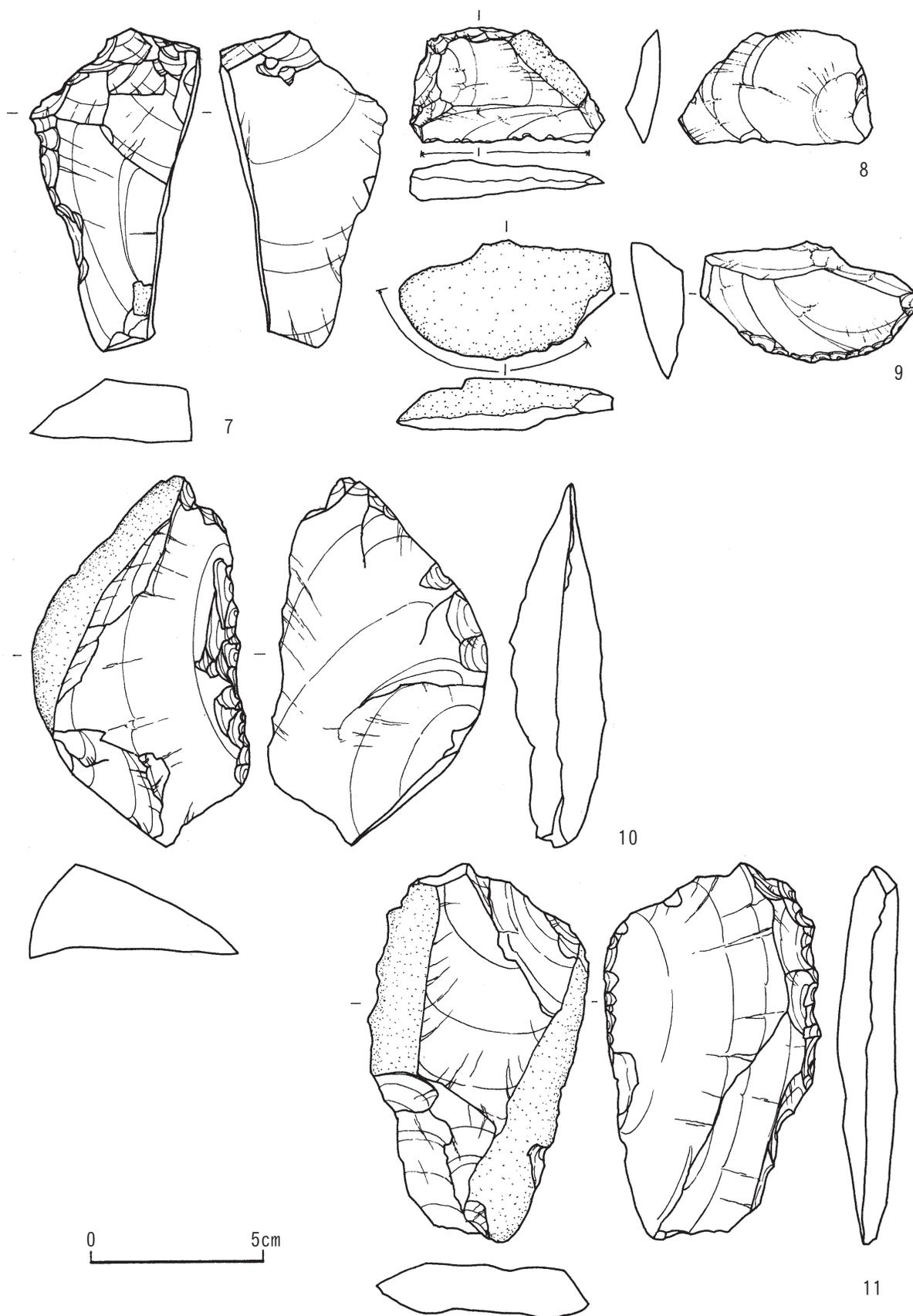
単位 mm, g



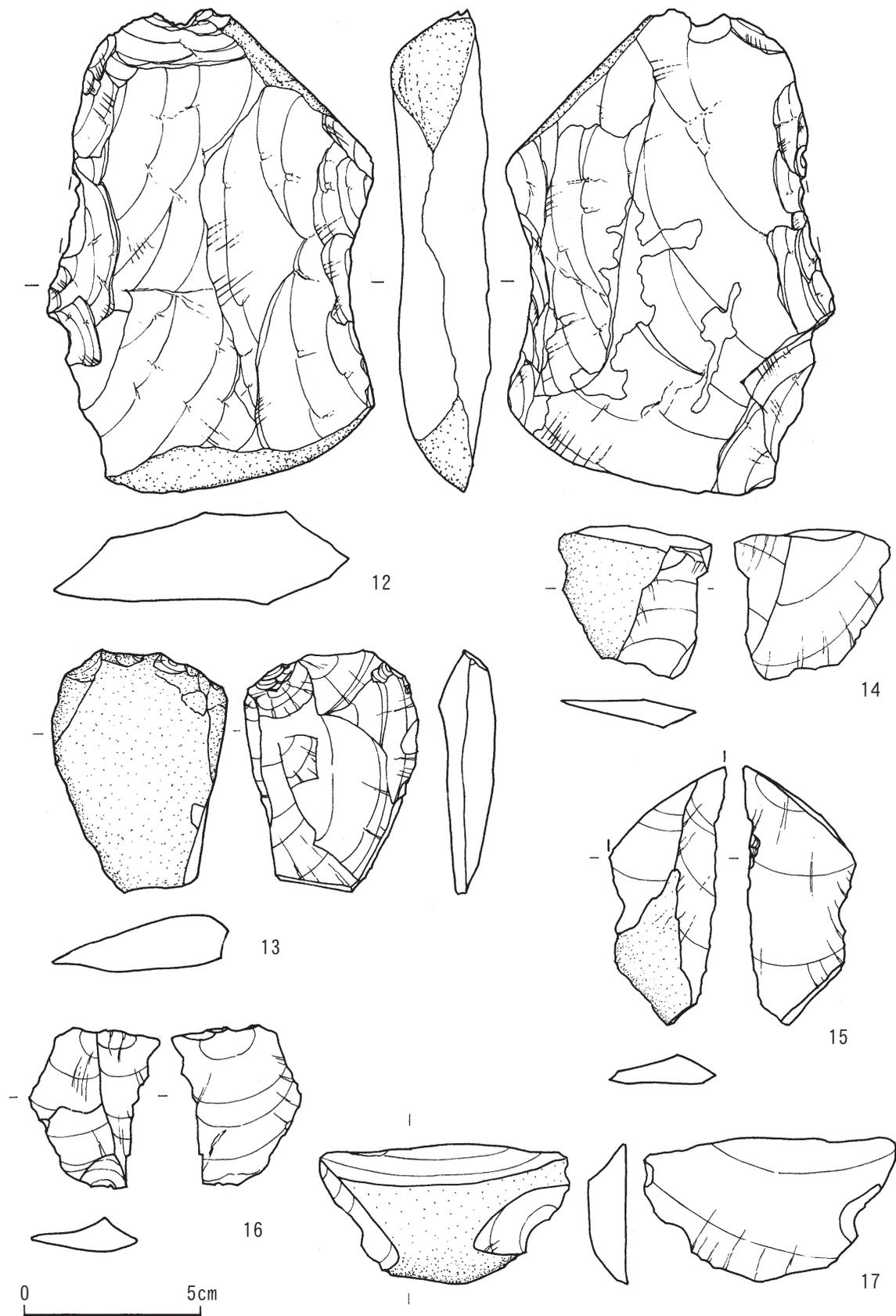
第6図 金剛萱遺跡・コンニャク畑地点採集の石器 1



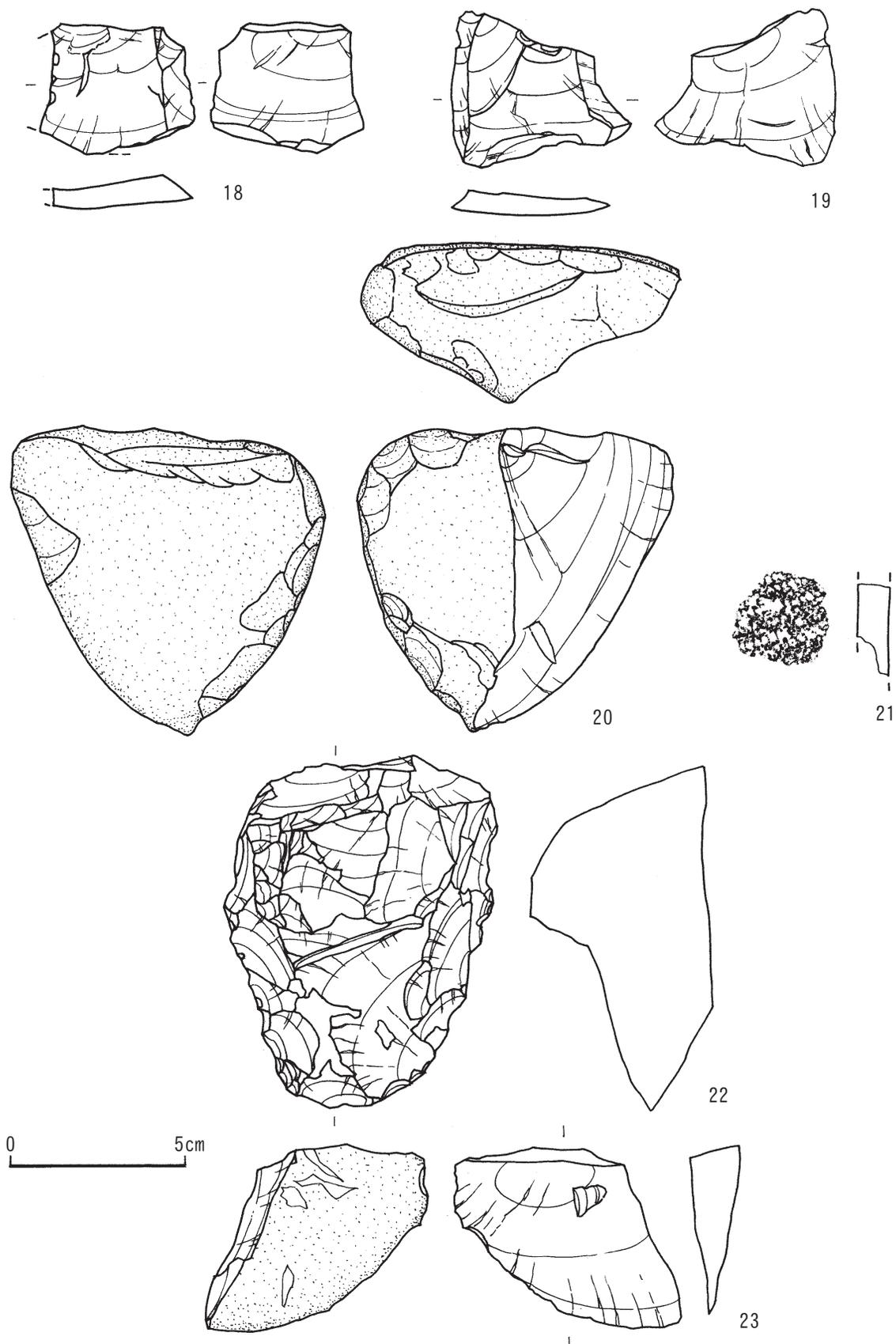
第7図 金剛萱遺跡・コンニャク畑地点採集の石器 2



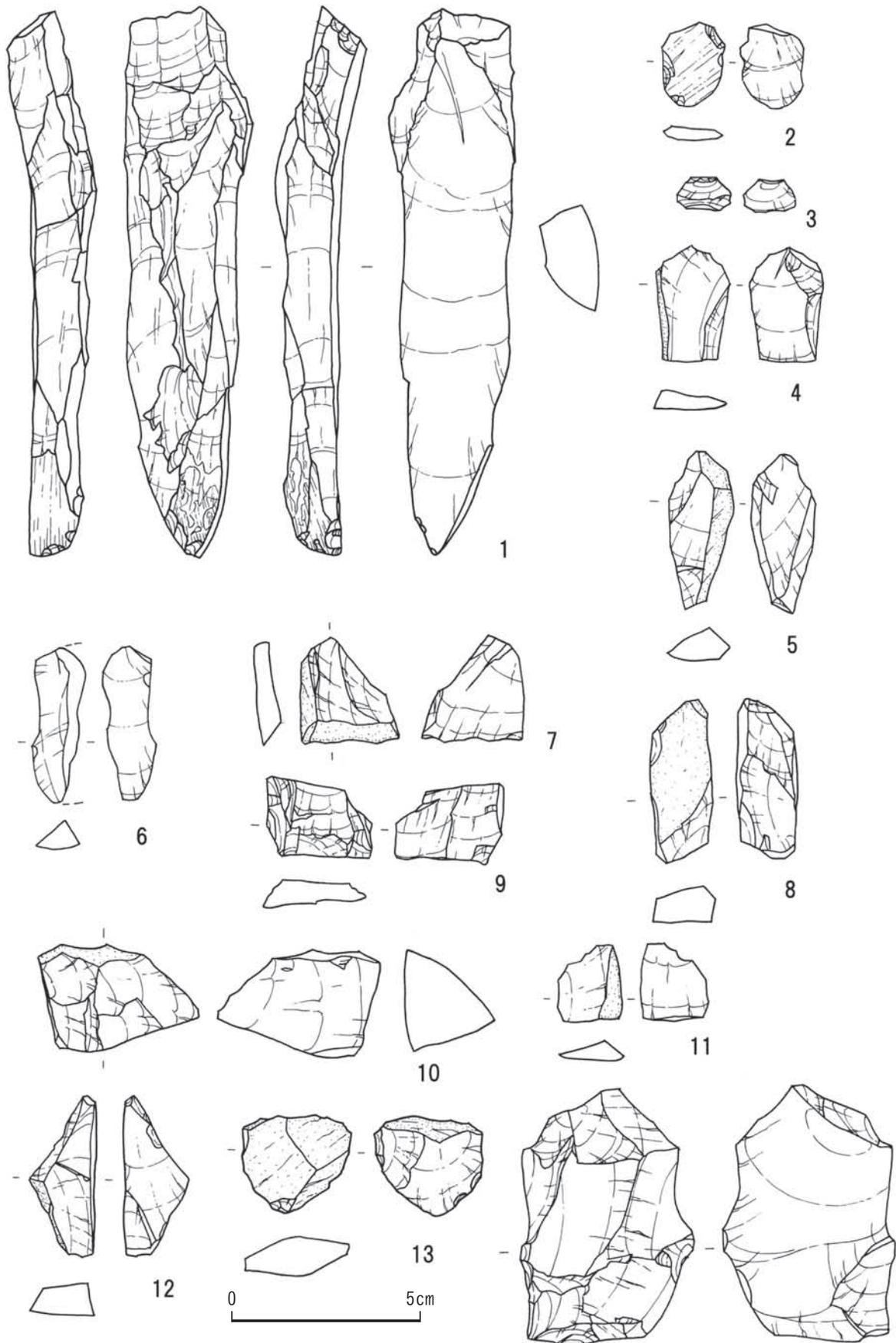
第8図 金剛萱遺跡・コンニャク畑地点採集の石器 3



第9図 金剛萱遺跡・コンニャク畑地点採集の石器 4



第10図 金剛萱遺跡・コンニャク畑地点採集の石器 5 (付土器)



第11図 金剛萱遺跡・林道地点出土の石器

16



1 金剛萱遺跡 コンニャク畑地点



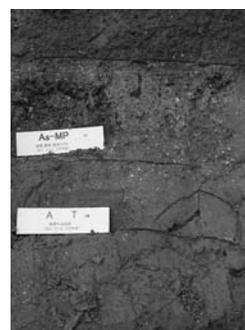
2 金剛萱遺跡 林道地点 第2回発掘2014



3 コンニャク畑地点2011年試掘調査



4 コンニャク畑地点 表面採集調査



5 同 地質層位



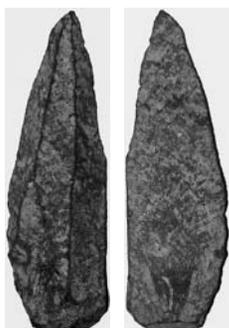
6 コンニャク畑地点 地層観察風景2015



7 林道地点 2014年発掘調査



8 局部磨製石斧 出土状況



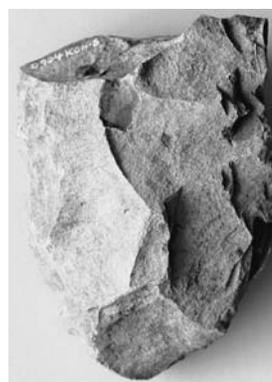
9 ナイフ形石器 A



10 打製石斧

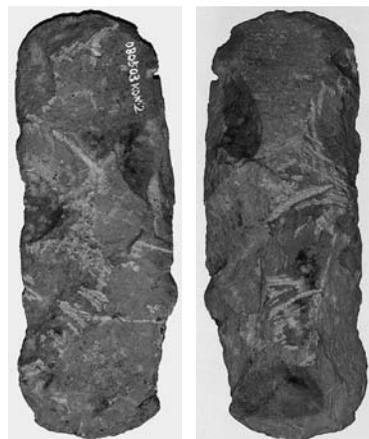


C



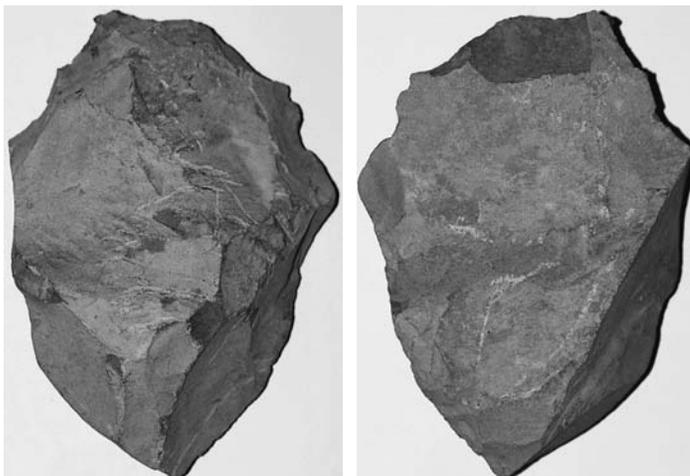
11 石器未成品 C

第12図 金剛萱遺跡の調査と出土石器



12 局部磨製石斧

C



13 石器未成品

C



14 石器未成品

C



15 剥離痕のある剥片

C



16 削器

B



17 削器

C



18 剥片

B



19 剥片

B



20 剥片

B



21 林道地点・局部磨製石斧

C

スケール



A :

B :

C :

第13図 金剛萱遺跡の出土石器